

17-10

グローバル・スタディーズ 授業事例

1	公開授業実施日時	2017年11月18日（土）10:00～12:30
2	場所	京都教育大学附属高等学校 地学教室
3	対象	京都教育大学附属高校1, 2年生, 京都聖母学院高校 1 年生 計68名
4	授業者	川井 亮（国語）／岡本 幹（理科）／佐古 孝義（英語）
5	島名	グローバル・ヒストリー
6	単元名	古典の世界を科学する
7	関連する教科・領域	古文／化学／英語
8	単元の目標・ねらい	「香り」をテーマに、古文＋化学＋英語の横断授業を展開し、教科横断的知識の活用を目指す
9	グローバル・スタディーズとしての目標・ねらい	「香り」に関する日本と西洋の比較／古典世界と現代との時代間比較を通じて、事象を多角的に相対的に見る目を養う
11	単元の評価規準【教科・領域として】	国語（古文）と理科（化学），英語の教科横断的な知識を駆使して事象を総合的に捉えているかを事後まとめなどで評価する
12	単元の評価規準【グローバル・スタディーズとして】	「香り」に関する日本と西洋の比較／古典世界と現代との時代間比較を通じて、事象を多角的に相対的に見る力が伸びているかを事後まとめで評価する
13	単元計画	全体は導入＋3部構成 【導入】「香水の歴史など」に関する資料を英語の知識を交えて紹介 【1】平安時代の日本人が香りをどのように扱っていたのかを古文の原典（源氏物語など）にあたり概観する 【2】「香り」に関する専門家（松栄堂）から香りに関する東西交流の歴史を含めた講義 【3】「香り」を合成する化学実験
14	本時の目標	単元の目標に同じ
15	本時の展開	≪別紙指導案を参照≫
16	グローバル・スタディーズとしての特徴	教科横断の内容を授業，講演，実習を1セットとする新しい形の授業のあり方は、これからのグローバル・スタディーズを考える上でのひとつのモデルとなりうる。
17	授業者から一言	

SSC 「古典の世界を科学する」 学習指導案

指導者 教諭 川井 亮

- 1 日 時 平成 29 年 11 月 18 日（土） 10：00～12：30（内 40 分程度が古文の授業）
- 2 学 級 京都教育大学附属高校より 12 名、京都聖母学院高校より 56 名（計 68 名）
- 3 場 所 地学教室
- 4 授業のねらい

・古典における文章の展開を理解し、考察を深め、文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。また、古典の世界を五感を使って想像し、古より培われてきた宮廷文化や、民衆文化を理解し、考察を深める。

・グローバルな学習の一環として、海外と日本というような物理的距離という横軸での側面だけでなく、上代を含む古代（とくに宮廷生活が確立された平安時代）と現代との時代的距離という縦軸の側面から、日本における香りの文化の比較対照を行う。1300 年ほど昔と現代では、実生活の違いは明らかではあるが、どこがどのように違うのか、また価値観はどのように変遷してきたのか、などを考察する。

5 本時の流れ

過程	学習活動	指導内容 指導上の留意点	評価の観点・規準 評価の方法
導入 5 分	これまでの SSC 活動を紹介し、古典の授業に興味関心を持たせる。	決して、文章のみを解説し、文法面における理解に留まらないよう注意する。	しっかりと耳を傾けて話を聞いているか。
展開 30 分	<p>・『栄華物語』より、「逢坂も 果ては往来の 関もあらず 尋ねて訪ひ来 来なば帰さじ」の和歌を紹介し、それに対して広幡の御息所は、どのような応対をしたかを考えさせる。</p> <p>・広幡の御息所が、練香を贈るという行動に出た理由を考えさせ、「折句沓冠」の和歌の修辞技法を理解させる。</p> <p>・また、『源氏物語』の薫物合の場面を紹介し、そのシーンを想像し、古典の世界を味わう。</p>	<p>・文法的理解のみではなく、この和歌が詠まれた背景知識や、和歌を詠まれたあとの返歌をするという、当時の文化を理解させる。（2～3 人程度で話し合いをさせ、さまざまな意見があることを知るとともに、自己理解、他者理解の契機とする。）</p> <p>・実際に練香を配り、視覚的あるいは触覚的に感じることで、古典の世界を想像させる。</p>	自分の考えをまとめ、それを他者に伝えるときにも、他者の意見を聞き、理解の深化につなげられているか。
終結 5 分	薫物合の描かれた絵巻物の紹介もしつつ、古典の世界において香りという文化は非常に重要であったことを理解させる。	今後の松栄堂の方のお話に繋がるように注意する。	